

0003279-000

特244-435

政界を爆撃す

岡本一己・述

大文社

昭和9

ABA

特244
435



政界を爆撃す

衆議院議員 岡本一己 述



目次

- 一、政界革新の荒療治……………(一)
——なぜ私は爆弾を投じたか——
- 二、不正事件の前奏曲……………(七)
——二百萬圓出した大原孫三郎と置去りにされた金子直吉——
- 三、利權魔に見舞はれた帝人株……………(二)
——その賣渡の真相を曝く——
- 四、ばら撒かれた數百萬圓……………(九)
——神鋼株處分の裏に躍る人々——
- 五、所謂五萬圓事件を語る……………(三七)
——疑惑に包まれた新事實——

六、査問會は私に何を語らせたか？……………(三)

—各委員の質問に答へて—

七、斷固として政黨を改革せよ……………(四)

—私の改革意見—

附

政黨改革要旨

國家躍進の新國策

政界を爆撃す

岡本一己述

一、政界革新の荒療治

—なぜ私は爆弾を投じたか—

現在の日本の政治は、實社會の進歩と比較して、非常に遅れて居ると、私は思つて居ります。一例を産業にとりますと、繊維工業の如き、先進國たる英國のランカシャーと比較すれば、四倍の能率を有つて居ります。其他、最近に發達した化學工業、是も非常な良き成績を擧げて居るに拘はらず、政治だけは其機構も其局に當る人も舊態依然として少しも革新されて居らないので、外相が「躍進日本」といふ言葉を用ひて居る現情に全くそぐはないものとなつて居

ります。立憲政治である以上は、政黨が議會に重要な働きを有つて居りますが、其政黨が古き資本主義の権化のやうな状態では、到底新しき國民の赴く所に遅れるといふことは當然なことであり、思ふのであります。

願れば國際關係は、通商と謂はず國防と謂はず、凡ゆる方面より日本を非常な窮地に陥れるやうに日々差迫つて來て居ることを考へますと、此儘では非常な危機に對處することが出来ないと考へて、此様な局面には傑出した政治家が當るのが一番革新の捷徑だと信じて、其人を森恪氏と私は深く信じて居つたのであります。

森氏の意見は、一昨年の選舉に政友會が三百三名といふ絶對多數を占めた時、此數は全體の七割に當る、七割を遠くから見れば一色だ、即ち一國一黨の姿と見て差支ない、此力を以て萬般の革新を行ふべきであると、斯ういふ建前から遲疑する所なく、諸政の改革を行ふといふ確信を有つて犬養内閣に其實行を計畫した事を聞いて居るのであります。所が舊來の因襲に依つて、政黨が尙ほ徒らに非常なる權勢を振はんとするのみにて三百三名も、亦舊來の政黨對立の時の一黨派の如くに動き改革斷行を成し遂げ得なかつたので、森氏は更に一步を進めて、政黨は暫く實力を發揮し得ない以上は、他の力を以てしても、此急務に善處する方法として、一時

政黨を休黨の状態に去勢して、宜しい、他の力を用ひて急速革新を斷行しなければならぬといふ立場に立つて軍部の力等をも大いに用ゐんとしたことを、私は直接に聴き、政黨が何故に斯く無力に陥りたるかを、更に検討する必要を感じ、約一年間、主として、政黨無力の根源何れにあるかといふことを、深く内密に、検討致したのであります。

政黨無力の根源は、所謂有力なる黨員に私心が強く、其私心が勢力を扶植する手段になつて、手段を擇ばず資金を集める方法に苦心する結果、財閥或は利權を漁るに至り、時勢に先立つ政策の樹立を妨げられる事を、はつきり捉へ得たのであります。是は選舉法の不備にも依りますが、尙ほ一つ重大なる原因は、時勢をはつきり認識し得ない所にあること勿論であります。

そこで時勢を認識することが第一と考へて、時勢を先づはつきり掴んで、之を以て、それ等の有力なる人々に私から屢々説いたのでありますけれども尙ほ情勢に引ずられて、「多數の議員をさへ有つて居れば政權は必ず來る」斯ういふ點に執着が甚だしくして、折角認識しかけた時勢をも犠牲に供する、此有様は、到底普通一様の勸説にては所期の目的に到達し得ないことを考へて、荒療治も亦已むを得ないことを覺悟せざるを得なくなつたのであります。

政黨の内部は、前に申した如く、有力者に私心が極めて濃厚に持たれて居る關係上、釀成

された腐敗は、全黨を掩ふに至つて居るので、是は恰も瓦斯が一杯に充填されたやうなものであるが故に、火を點じさへすれば爆發する。理を説いて其理に一致しない以上、爆發せしめて然る後に更生を圖らしむることも一つの方法と考へて、遂に身を以て導火繩の役を勤めたのであります。所で其結果は、遂に政黨を今の所混亂に導く程度に止まれる如く外觀せられて居りますけれども、必ずや一大分解作用を起し、後に意義を備へた幾つかの團體を構成するやうになるだらうと信ずる譯で、其前途に深き關心を有つて居ります。

政黨が小黨に分立することは、在來の囚はれた政治運用の方法から見れば、甚だしく不便と觀察する方もありませうけれども、一黨一派が勢力を壟斷するよりは、寧ろ害の方面だけは確に防がれる。其効果は相當あるものと思ひます。又國民も往年の如く、政治は政治家に委せて置くといふ時代は過去つた以上、害を防げば、必ず國民の要望する所を體して働きを爲すことに成ると思ふのであります。

唯今私の心境は、前途にまだ一戰はなければならぬ幾多の障礙を覺悟して居りますが、酒々落々として喜んで尙ほ戰ひ得ることを國民の輿論に聽いて、確信致して居ります。

一體、日本人は人の非を發くなといふ道徳に支配されて居るので、私の今回の摘發を道徳

上遺憾なことではないかといふ方もありますが、私は、公の事に於ては左様な小さな道徳律を超越して、同じ道徳でも大義の爲には、所謂親をも滅すといふ此覺悟が、政治に當るものと執るべき根本觀念であると考へて、敢て此舉に出でたのであります。

殊に、議會は國民の意思を以て、一面には新たな立法を爲すと共に、一面には實際の政治及び行政を忌憚なく批判糾弾する任務を有つて居ります。隨て、議會に於て糾弾摘發することとは、人の非を發くに非らずして、綱紀を紊せるものを廓清し、再び綱紀紊亂を取てせしめざる政治的制裁を加へるものでありまして、決して個人道徳の範圍に囚はれるべきものではありません。若し議會が糾弾剔抉しなかつたならば、權力を有つものは之を濫用して、遂には如何なる結果、或は事態を招くかも知れない、若し左様の如きこと屢々重なるに於ては、立法府を獨立せしめたる我憲法の精神は全く蹂躪され、且つ地に墮ちてしまふ、斯く信じまするが故に紛々たる批判は一向意に介しませぬ。

近頃道義責任觀念が薄らぎたることは、斯ういふ問題に對して、曾て第五議會に於ては、時の農商務大臣後藤象次郎氏の下に次官たりし齋藤修一郎氏が、取引所の認可に絡んで、金時計一個を受領したるを瀆職に依る官紀紊亂とし、彈劾上奏案をさへ可決した事があるのに對照致

しまして、感慨無量のものがあります。世相人心は益々險惡なる時、第一に必要とすることは政治が正義觀念を以て運用せらるゝ時こそ、此惡化し行く世相に對して最も良き對策と信じられまするし、頻發せる血盟團事件、五・一五事件、神兵隊事件が、悉く權力濫用と、國情認識不足に依る其日暮しの政治に對する公憤の爆發と考ふる以上、どうしても此際一大警鐘を實物を以て與へる必要を感じて此舉に出でた次第であります。

目下の形勢では、恐らく此綱紀肅正の輿論の力に依つて、齋藤内閣の鳩山文相一人を退官せしむる彌縫策を以てしては、延命を實現する能はず、遂に總豫算の成立を契機として崩壊するであらうと思はれます。後繼内閣は如何なる内閣か、今豫測を許さざるも、現下の國情に當儀りたる内閣が成立せざる時は、私は依然其内閣に向つて戦ひを續け、堅實なる内閣の成立迄、今日の態度を變更しない覺悟であります。

私が第六十五議會に於て、現政界の裏面の發表を決意するに至つた動機と根本目的とは、以上述べたことによつて、大體つきると思ひます。決して一朝一夕にして思付ひたことでもなく、深い根據と強い信念とによつて、やむにやまれぬ濕濁せる現政界の根本的廓清の熱情が、

私をして遂に起たせたのであります。眞の目的は、政界の暗黒面を國民の前に徹底的に曝露することによつて、國民大衆の中より政治革新の烽火が擧げられ、正しく明るく而して強き政治の實現を期して已まぬものであります。私は政界革新のためには、今後も凡ゆる方面に向つて、荒療治を辭せない決心であります。

以下、順を追ふて現政界の實相を語り、國民の嚴正なる批判に待ちたいと思ひます。

二、不正事件の前奏曲

—二百萬圓出した大原孫三郎と

置き去りにされた金子直吉—

まづ帝國人絹株に就ては、當時隨分澤山の引取申込みがあつたので、臺灣銀行當局も無論考へたでせう、けれども實際は此株の前途は、極めて有望だといふ所からして、皆謝絶して居たのであります。それで今後述べます政商達は、是は普通的手段では、其株を引受けることは出來ない、どうしても時の大官を動かして臺灣銀行當局を承諾せしむる方法を執るの外ない、斯

ういふことになつて、あの所謂番町會の人々が中島商工大臣に相談をしたのであります。

そこで中島商工大臣は色々考へたり、又多少動いて来たが、臺灣銀行の頭取に對しても、大藏省の監督官に對しても、特殊な關係といふものを有つて居ない、それで、これも番町會の一人である讀賣新聞の社長正力松太郎氏が鳩山氏と懇意な關係上、鳩山氏の所へ行つて其話を持込んだ、それから鳩山氏が日本銀行の總裁の所へ電話をかけたなり訪問したり、一方私が議會の演説に述べて置いた六高會の人々が活動することになつて、それで六高會の方からは島田に又因縁を以て懇談をする、斯ういふことになつて、今度は三土を動かした、……三土を動かしたのは住田正一人であります。是は元三土氏と特殊な縁故の人であります。それで住田正一と臺灣銀行の庶務課長をして居つた岡崎旭とは非常な懇意な中で、矢張り六高會の會員であつたので、岡崎には住田から話をし、色々な内部的情勢は岡崎から取つて、段々策謀して行つて遂に長野護、山一證券の太田、杉野喜精等といふものと相談をして、運動資金を岡山の大原孫三郎の所から持出したのであります。岡山の方から持出した金は二百萬圓と稱せられてゐます。

其當時別に松本といふ辯護士の事務所で保證金を二百萬圓積めば僕は頭取と特殊關係がある

から必ずあの株を取引させてあげると言つて、前述の人達が兜町方面の色々のものを勧誘して團體を作らせ、二百萬圓ばかり集めようと相談してゐました。所が其金を集めて居る中に、大原の方から二百萬圓持つて来て之に對抗するやうな方法をとつて、さうして遂に成功したといふわけであります。松本は、それですつぽかしの受けたのです。これが帝絹問題の起る前奏曲であります。

次に、神鋼株の方は、是は元鈴木商店の總番頭だつた金子直吉、此人が是非神鋼株を持ちたい、鈴木商店の事業であつた色々な會社が、皆臺灣銀行の所有に移つて、漸次整理されて行くが、神戸製鋼所位は是非自分の所に收めて、鈴木商店は滅びてしまつたが金子直吉の努力に依つて是だけの大きな會社だけは残つた、斯う言はれて見たいといふ一つの執着心からと、もう一つは元の主人に對しての酬ひる所も其所にあるといふ風な考へ方から運動をし始めたのであります。それで、元鈴木商店の東京支店長だつた長崎榮藏、それから鈴木商店の店員だつた住田正一の二人を呼び付けて、

「君達は番町會の勢力を利用して帝人株の運動で成功したんだから、其筆法で今度は僕の頼

み聞いて呉れ」斯う頼んだのです。それで金子氏の肚では、長崎も住田も長年の間鈴木を食つた者だ、元の主人の爲といふことになれば決して反きはしまい、斯ういふ考へで安心して頼込んで居りました。二人も「金子さんの話は尤もです。極力やります」と言つて運動を繼續して遂に昨年の暮に引受の契約が成立しました。所が金子氏の所へは何とも言つては來ない、金子氏は何遍も電話をかけたなり何かして首を長くして居たが遂にやつて來なかつたところか何の挨拶もなかつたのであります。それで金子氏は、それでは春になつたら持つて來るかも知れぬと考へて、銀行方面へも其資金を頼込み、喜んで準備萬端遂げて居たわけです。所へ住田、長崎二人からの返事は、「決まりは決まつたけれども貴君の所へは差上げるものは無いのだ、或大臣からの話で引受人は別に決つた、だから誠に遺憾だけでも仕方がない」……と金子氏の豫期を全く裏切つた言葉であつて、金子氏は全然すつぽかしを食つてしまひました。此或大臣といふは、一つは中島商工大臣、一つは三土鐵相のことでありました。果せる哉、三土鐵相の弟の宮脇といふ人が、高松の百十四銀行へ一萬二千株持つて行つて預けた、斯ういふことになつて今日結果が着いて居ります。これが神綱問題の起つた概略であります。以上概記した二つの問題に就て、詳しく述べることに致します。

三、利權魔に見舞はれた帝人株

— その賣渡の真相を曝く —

私の是より述べんとすることは、臺灣銀行の所有株式、この株式の賣渡に對して、多くの疑惑が含まれて居ります。私が斯様な事を述べます出發點は、綱紀紊れて國家が健全なる發達を遂げることはない、最近の外電は何を報じてゐるか、巴里に於て内亂に等しき所の大暴動が勃發してゐる、其の原因は何にあつたか、政府の大官が政商々結託して不正を働いたに對し、下院が何等の論議を致さざる所に民衆怒りを發して、あの大暴動となつたのであります。第六十五議會開かれて以來、未だ綱紀問題に對して多くの論議を盡さずに居るといふことは、是等のことと對照して、私の遺憾禁する能はざる所であります。

臺灣銀行が、かの昭和二年、全國民をして戦慄せしめたる所の、あの金融パニックを起した根源であつた其殘務が、今日も尙ほ國民に向つて多大な負擔を課しつゝあるのであります。此の間に臺灣銀行が債務者——色々な融通をなしてゐた者、各社其他の債務者より辨濟の保證と

して取つてゐた所の擔保物を、山の如くに引受けたことは、あの年の八月頃と記憶致しますが臺灣銀行調査會に於て、私共に殘されてゐるあの莫大な金額と對照して見まして、相當多數の株式といふようなものを保持してゐることは、當然のことであります。

所で今議會貴族院に於て、大藏當局が答辯致された所に依れば、『有價證券の賣却處分に就ては、法律上何等制限を受けることなく同行の自由に處分し得る所である』と斯様に稱してゐるのであります。法規の命ずる所は或は然らん、併し臺灣銀行が三億に餘る負擔を國民にかけつゝ、其國民に對して辨濟すべき唯一の資源である株式の賣却といふやうな方法をとるに當つて、何等の制限を受けることなく自由に處分し得る所なりと考へるは、正に監督權を拋棄し、銀行と一體をなしてゐると稱さざるを得ないのであります。更に大藏省は、同行を監督してゐるのであるが、『監督上特に制止又は制限を必要としない限り、敢て干渉に渉るが如き容喙をなすべきではない』と稱して居ります。又更に、『其處分の時期方法を選ぶの必要あることは勿論で、其點に關しては常に銀行當事者の慎重なる考慮を求めた所である』と稍々變改の感あることを言ふてゐるのであります。

果して然らば、『時期方法を選ぶの必要あること勿論』といふことに就いて、問題の帝國人幾多の資料によつて述べんとするものであります。

帝國人造絹株式會社株式券が、將來如何なる値を示すものなりや、此會社の前途、如何なる發展を爲すべきものなりや否やといふ點になると、臺灣銀行は過半の株の所有者であり、此内容に就て十分なる調査は常に遂げられてゐる筈であります。私共が未熟な經濟眼を以てしても、帝絹の株式が非常なる勢を以て高値に向ふべきことは、昨年四月頃、優に豫見し得る幾多の材料が存在してゐたのであります。人造絹絲が非常なる勢を以て販路を擴め、昨年に於ける我國人絹の世界に於ける地位は、嘗て第五位、或は第六位にあつたものが、俄然として第二位、將にアメリカの壘を摩さんとするに至つた。此間に於て、帝人が如何なる成績を擧げつゝあつたか、七年下半期の利益率は、即ち投下して居る所の資本を基礎として、製品を賣却し賣つて得た利益率が、どのやうなものを示して居つたかと云ふと、七年末の決算に依れば三割四分六厘であつたのであります。所が八年の上半期になると、四割七分七厘に達して居るのであります。其増進振りは驚くべきものであるばかりでなく、將來を推す所の資料、即ち固定資産の償却の歩合、製品採算の歩合と云ふやうなものを見ると、財界が稱して居る五大人絹會社

中、帝人は一番好い成績を挙げつゝあるのであります。試みに、製品採算の項目を取つて見るならば、函當り平均原價は、帝人は六十四圓二十錢。昭和は六十九圓九十錢、旭は六十七圓二十錢、倉敷は六十四圓四十錢、日本レイオンは六十四圓七十錢、而して函當りの利益は、帝人は百三十五圓、外の會社は百三十五圓に達して居るものはありません。唯、僅かに日本レイオンのみが百三十一圓と云ふ比較が出て來るのであります。又固定資産の償却を比較すれば、帝人は八年の上半期に於て、償却三百萬圓を行つて居ります。他の會社に致しますと、或る會社は百萬圓、或る會社は百十萬圓と云ふやうに、帝人の如き成績を舉げて居らないのであります。又月産一函當りの固定資産の比較を見ても、日本レイオンの如きは一・二二五、旭は一・二三〇と云ふ數字を示して居り、他の會社はこんな狀況であるに拘らず、帝人は〇・九二八と云ふ良成績な營業状態を示して居るのであります。随つて其株式の價格の如きは常に上つて居る、時に或は安かつた事もあらうが、其比較も茲に申上げて見るならば、七年中の最高は百五十九圓であり、最低が八十二圓四十錢、八年の一月より五月迄最高が百五十八圓三十錢、最低が百二圓五十錢、五月二十九日より六月三日迄、是は即ち賣買の行はれた時期を指します。此間の最高が百四十五圓、最低は百三十二圓を唱へられて居ります。更に、賣つてから後はどう

なつたかと申しますと、六月五日より十日迄の間恐らく此時が實際に金の授受が行はれた時と思はれるが、其時に於ける市場の値付は、高値は百四十五圓で、最低が百三十九圓五十錢、而も是は配當落、即ち三圓七十五錢を加へるのが普通の相場となるのであります。斯う云ふ風に漸次上つて來て居るのであります。

曩に云つた時期、方法を選ぶの必要ある事は勿論と、大藏當局は云つて居たのであります。此表の示すやうであれば、時期方法を得たと云ふやうな事は、斷じて私は詭辯であると言はなければなりません。

そこで、私は時期方法を選ぶ必要のあると云ふ事は勿論言はれ、同時に御終ひの方に於て、其買手を選ぶ標準として掲げられて居るのを見ますと、一、實力のある資本家であつても、眞面目なる投資を目的とする向きに對し、二、事業其ものを諒解し、且つ今迄の經營を尊重する事を重點とし、三、而も一部株式の獨占的情勢を誘致する事をなくして、有利公正に、四、支拂は現金即時決済の支拂方法に依り圓滿なる取引を爲す事を期し、是が爲には一般賣出の方法を取るよりも、寧ろ實際銀行が取つた方法を適當と認めたと、斯う云ふ標準に於て行はれた事を諷はれて居るのであります。

茲に於て、私は疑はざるを得ない。五月十八日何人と此賣買を契約したか、仲買人と契約したか、代理人と契約したか、買受本人と契約したか、若し代理人と契約したものとすれば、代理權を證明する方法はどう云ふ方法を以てしたか、之を其内容と共に——内容と云ふのは他の條件、即ち私共が調査に歩いて聞く所に依れば、配當金を括め、同時に將に増資せんとする其後株の權利をも附けて、私共はそれを條件として買ひましたと云ふ事を云つて居りますが、果して其通りであつたかどうか、大藏當局が貴族院に於て辯明せられたものは、中々長々しいものであつたが、此等の點には少しも觸れて居らない。更に又手數料の點になると、大藏當局は今日迄仲買人に於て賣買をすれば、百圓餘の株は五十錢の手數料を拂ふ事になつてゐるから、一圓の手數料は當然であると、斯う云ふ事を言はれて居る、而も此手數料は仲買人に拂つたかどうかと云ふと、仲買人の手は經て居ないのでありますから、仲買人に拂つて居るのではない。仲買人は五十錢の手數料を取る事は當り前の事である。取引税も納めなければならぬ、彼處に従事して居る所の人々に御飯も食べさせなければならぬ。之を十萬株、二十萬株と一纏にして、聞かないうちは分らないが、何だか譯の分らぬ『シンジケート』なるものにして、さうして一圓の『コミッション』を拂つたのが當り前であると云ふやうな眼を以て、

銀行を監督されて居るとしたならば、臺灣銀行が曾て吾々に三億何千萬圓の損害を掛けた事も顧みて矢張り大藏當局に其責任があつたのではないかと考へらるゝのであります。言ふ迄もなく、臺灣銀行の今日の頭取は如何なる人であるか、曾て大藏省書記官時代に於ては、臺灣銀行監理官ではなかつたか、臺灣銀行監理官として臺灣銀行の内容に對して、知悉して居る人であつた譯でありませう。其島田と云ふ人が、若も茲に辯解をしたやうな頭で以て、臺灣銀行を今日經營して居るならば、又今後如何なる事を吾々國民に向つて負擔せしむるか分らないのであります。

それから、私の更に奇怪に思ふ點は、取引は六月に行はれて、五月に遡つて名義の書換をやつたと云ふ點に對して、或は大審院の判例を引き、或は學者の説を聽いて、適法であると云ふ辯解をして居られる、此名義書換と云ふ事は、即ち株式を渡してやる行爲であります。金を取らずに渡してやつたと云ふ事は、どうしても私共日本人の常識として、銀行者の執るべき態度とは信ずる事は出来ないのであります。金を取らずに株式を渡してやつて、さうして其名義の書換は遡つて行つた事は一向に差支ないと、斯う云ふ大審院の判決はあるべき筈はないのであります。

恐らく、引例した所の大審院の判例なるものは、金も取つた、實際の契約の履行も行はれた、唯名義の書換のみを或種の事情に依つて行はないで居つたものであり、それを契約の履行の行はれた時に遡らして之を行つた、其事を恐らく大審院の判例と云ふのだらうと思ふのであつて、今回の如く莫大な金で、而も金を取らずに株式を渡してやつたと云ふやうな事が、實際行はれて居つたとすれば、實に奇々怪々、私共の常識では之をどうしても受取る事の出来ない事實と思ふのであります。

又第四にある所の、一般賣出の方法よりも、實際銀行の執つた方法を適當と認めたと云ふ事に付て申上げるが、事實は色々の人に分れて行つたやうであるけれども、實際に當時に於て契約されたのは、此條件に當嵌まる人と、私共は信ずる事が出来ない、況や先づ金高から申上げるならば、非常に大きい金高でもあります。二十二萬株、一株百二十五圓、三千三百萬圓に達しますが、之を一人の人が受けて居る、而も是には直ぐ續いて拂込を要する所の子株の権利が附いて居るのであります。其子株は三株に付て二つの子株でありますが、此十二圓五十錢第一回の拂込としても、是亦三百六十七萬五千圓と云ふ金を必要とするのであります。斯ういふ大きなものを、此多額な金を出して今日引取るやうな人が、我國の經濟も膨脹して居るとは云

ひ乍ら、私はなか／＼あるものとは思はれない、總て此標準でやつたと云ふ事は、唯一時の辯解に過ぎないと云ふ事に歸着するのであります。

そこで、私は前に言つた其契約の當事者は誰であつたか、それから實際に履行した時は何日であつたかと云ふ事を、どうしてもハッキリとしなければならぬ、疑惑は此處に伏在して居るのであります。其の事は又後に述べる事にします。

四、ばら撒かれた數百萬圓

— 神鋼株處分の裏に躍る人々 —

更に、神戸製鋼所株の處分に付て述べるならば、大藏省の方針では、此株も何時迄も臺灣銀行は持つて居る事は、臺灣銀行經營自體の上よりして、餘り宜しき方法ではなかつた、隨つて之を或る時機を外さず賣るの方針を採つて居つたと云ふ事があります。私共が色々な方面より聞きますと、此株の賣下を要求した人は澤山あつたやうであるが、特に『本年の一月、即ち松ノ内に此株を賣る事が、最も好い機會であつた』と云ふ事は、如何なる理由であるか、而

も契約は十二月中であつたと云ふが、一體十二月の末、押詰つた時に於て、果して好い時機であつたかどうか、一般からすれば私は好い時機ではなくして、寧ろ一番をかした時機を選んだものであると言はざるを得ない、更に又、此賣渡値段に對しても、非常に好い値段を以て賣渡した如く唱へられてゐる、所が此株式こそは、帝人とは異り、賣買のなかつた株式でありませぬ。併しながら、賣買はなしと雖も、軍需關係の工業として、財界の人々は非常な注目を拂つて居つた株式であります。随つて其會社の内容、其會社の將來等に對する調査研究と云ふものは、財界に關係のある人々の間には、極めて詳かに検討されて居ります。現に昨年の八月發行されました株式投資年鑑の神戸製鐵所の調査項目を讀んで見ますと、目標値段を七十圓と書いております。配當は近く實現する、優先株のみならず普通の株式に對しても配當致す可能性は、十分存在して居ると云ふ事をハッキリ書いて居りまして、其内容を見ると、各工場の製品は、何れの工場も盛に煙突は煙を揚げ、累月産額を累増して居るのでありますが、殊に昨年の下半期に入つて以來、著しい成績を擧げつゝあつたのであります。即ち目標値段七十圓を掲げてある所以は、此處にあるであらうと思ひます。實際に又、今まで無配當であつた所の株は今度は配當金が付く事になつたのであります。是は徒らなる推測を書いたものではなくして、

それ等の資料を皆検討して、出来上つた所のものであり、斯様に此株に對しても、暗相場と云ふやうな文字を以て葬り去る事を許さざる、幾多の資料が存在して居るのであります。最後に大藏當局は、是等有價證券の値段は大分昂騰して居るが、當時に於ては豫期し得ざる事があつたらうと考へられると、斯う斷定を下されて居るのであります。まるきり嘘であります。今騰つて居るのは、特殊なる事情に依つて騰つて居るのではない、騰るべき趨勢を示して居る内容を會社が持つて居りますが故に、當然騰つて來たのであります。然らば此機會を外さずに賣拂つたのは、極めて賢明なる處置であると稱せられるが如きは、全く大藏當局に於て此財界に對して何等の鑑識眼をも具へて居らなかつたと申す外はないのであります。若し必要とあれば、私の手許にある所の、此發表されて居る參考資料を皆差上げて宜しい、そこで之に對して今日置々の非難が浴せ掛けられるのは當然であります。私が色々な方面に於て、此事實の真相を掴まんとして足を運んだ時、斯う云ふ圖解を書いて私に渡した人がある、それは斯う云ふ圖解であつたのであります。

臺灣銀行總裁 島田茂 (第六高等學校出身) 秘書 岡崎旭 (第六高等學校出身) 番町會
永野護 (第六高等學校出身) 山一證券 太田某 (第六高等學校出身) 三土鐵相の秘書官

米田規矩馬君、(第六高等學校出身) 鳩山文相の秘書官 林讓治君、(第六高等學校出身) 住田正一、(第六高等學校出身)

之を横に書いて、更に縦にどう云ふものを書いたか、岡山財閥と云ふ名前を上冠して、黒田大藏次官、島田臺灣銀行頭取、更に之に『クロス』して番町會、是で分るだらうと、其人は言つたのであります。私には一向分らなかつた、そこで、其人に對して、私には分らぬからして其説明に、註を加へて貰ひたいと云ふ事を頼んだのであります。其人の話に曰く、『即ち是等の高等學校出身者の一團が、此問題に對して、悉く活躍をした人々であり、番町會は又是と交錯して、そうして過去に於て色々な人より申込んだ其買受の申込を一蹴せしめて、茲に契約の成立を見るやうな運びと成つたのである』

そこでどう云ふ人々が、過去に於て申込んで居つたかと云ふ事を、更に尋ねて見たのであります。所が色々な者が出て来る、帝人の株の買受人の中には、今まで新聞或は雑誌に謳はれざる者として、田村駒次郎と云ふ人が一萬株別にある、是は安田善兵衛と云ふ人の婿である森廣藏と云ふ人より、臺灣の理事高木復亨と云ふ人に話をして引取つて居る、それは一番初めだと云ふ事であつて、八年三月に此事が行はれて居る、それ以來引續いて各方面より、臺灣銀行當

局に對して此賣渡の要求があつたのであります、最後に纏まるように『ブローカー』の役を勤めたのは、前中島商工大臣であり、此中島氏と力を協せたものが番町會、此番町會なるものに朦朧として含まれて居りますが、其外廓を描いて私に示したものの中には、前に申した六高會の人々がある、此人々は私は如何なる人であるかは知りませぬが、是等の人々の力のみを以てしては、到底他の對抗、即ち拂下を對抗して居つた人々を一蹴し去るだけの力のない者で、其背後に悉く『バック』があると云ふ事を其人が私に言つて居るのであります。

更に是は今まで世上に謳はれて居らぬ材料であります。臺灣銀行が豊年製油株式會社の株式を持つて居つたのであります、之を最近に賣却して居る。此賣却に對して大藏當局は管理上如何なる報告を見、又指示したかそれを此際ハツキリとして置きたいのであります。而して、臺灣銀行當事者が定款に依つて定められた所の報酬は、幾何を給せられて居るや否や、私の聞く所に依ると、頭取は五千圓、理事は三千圓と承つて居るのであります。所が東京の理事二名、柳田と云ふ理事と高木と云ふ理事と島田頭取、此三人は最近に於て皆、悉く宏壯なる邸宅を所有するに至つたのであります。臺灣銀行の理事者として三千圓、五千圓は、無論外の特殊會社と比較すれば、非常に安い報酬であります。

併しながら、實際に受取つて居るものはそれだけではない、頭取は年三萬五千圓を受取つて居り、理事は二萬五千圓を受取つて居る、そこで、行員曰く、何處からどうして定款以外の金を受取つて居るのか、帝國人絹の決算期毎に、重役は所謂重役賞與金なるものを分配の項目に於て可決され、之を受取る、所が其受取つた總額を臺灣銀行に持つて来て、臺銀に於て島田頭取、高木理事、柳田理事、是等の人々の所で又分割して、袋に入れて渡して貰つて来る。そこで甲の人には一萬圓あつた、乙の人には八千圓あつた、丙の人には一萬五千圓あつたと云ふ風に、色々袋の内容は違ふので、誰も其總額に付ては分らない、斯うして臺灣銀行當事者が掠め取つたものも、長年に亘つて少くないと云ふ事を言つて居ります。

又爲替の差益或は差損と云ふものゝ項目を掲げる中からも、是等の理事者は取つて居るのではなからうかと云ふ事も、行員は言つて居ります。斯う云ふ風に行員からさへ疑はれる所の重役、此人々があつたの三萬圓、或はそれ以上の株の賣買に當つて、利を漁る事殆ど類例なしと稱せられる所の番町會の人々と、茲に一團となつて行つた裏面に於て、國民が之を疑ふのは、私は疑ふ方が無理ではなくして、疑はれる方が當然ではなからうかと思ふのであります。此内容を更に申上げるならば、配當金の行衛も不明と云はれて居るのであります。買った方

にもまだ行つて居らぬ。臺灣銀行の帳面には、買った方に渡してやつたと斯う記帳されて居る、それらのものが何れの方面に消え去つたのであるや否や、大藏當局の責任として、三億圓以上の國民の負擔に歸する損害を補償して、其金を以て復活せしめたる所の臺灣銀行、此臺灣銀行のそれ等の風評、或は内容等に對して、何等聞いて居ないと云ふ事は、恐らくなからうと思ふのであります。

昨今我國の社會狀況は、非常なる不安を包んで居るのであります。或人は之を以て非常時と言ひ、或人は之を以て革命の零團氣に第一歩を進めつゝあると稱するのであります。此不安なる状態に於て、社會の民心を正しくし、綱紀を維持して、而して來らんとする國際關係の悪化是等にも備へなければならぬ重大なる責任を持つ者は、法治國——我國に於ては法益の代表者、檢事其人が眞に活眼を開いて世の中の隅々にまでも觀察しなければならぬ、此事に對して漠然ながら世の中が疑ひ出した、其反映として雜誌に新聞に記事が載るようになって以來、相當の日數が経過して居るに拘らず、司法當局は之に向つて何等の捜査或は檢舉の手段を盡して居らないと云ふ事は、世相と對照して、何ぞ其怠慢なるやと、私は言はざるを得ないのであります。

先に私が申上げた如く、値上りする事が分つて居り——自ら經營の内容に入つて居る人であり、私から分つて居る、子株が附く事も分つて居る、子株が附くと云ふ事も經濟常識で分つて居るに拘らず、之を故らに下つた時に賣つて、自分の主宰する所の銀行に損害を掛け、而も其の損害は何處に行くか、國民全體に及ぶべき所の、此臺灣銀行の理事者に對して何等の手も付けない、表面から見ても、それだけで確に背任罪が成立致して居ると私は信ずる、何故斯様な問題を不問に附して居るや、議會に於ける此の私の質問に對する銀行局長の答辯は、私のお尋ねした點には少しも觸れて居なかつた、何故かと申しますならば、人絹會社の重役、臺灣銀行に置ましましては其賣拂の手續を執る衝に當つた人、而して改造後に於ける人絹會社の重役になつて行きました所の人、此人と大久保銀行局長とは兄弟の關係を有つて居られるのであります。私は前にも申しました如く、大藏省の當局、大臣は別と致します、當局は臺灣銀行と全く一體を成して居るのであります。謂はゞ私の此處で論ずる時に於ては、被告の一人であります、其人をして、答へしむる大藏大臣の御考へは、ぼけてしまつたと申せばそれ迄であります、ぼけずして判斷力を有つて居つて、答へしめたと申さるゝならば、恐入つた次第と申すの外ないのであります、私の尋ねましたことは、御答の出来るものもあつた筈

である、所謂契約の當事者、此當事者のことは一言も觸れられて居らぬ、成程觸れる事は出来ないでせう、屬僚の身分として大臣の名を此處に出すことは出来ないであります。今日議會は國民から如何に批評されて居るか、議會は其有する權能を拋棄して、徒らに政府のよたくを補強工事の眞似をして居るのではないか。

私は暴露致します、某大臣が昨年の盆のあの百三十人とかに配つた金は、何處から取つた金であるか、暮に百三十人とかに配つた金は何處から取つた金であるか。

私は徒らに言論を弄する者ではないのであります、隨つて確然たる證據を握らぬことを申すのではない、私は是等の點に對しましては、神聖なる司法權の發動を要求して、それに依つて國民の間に明にする事が一番良き方法であると信ずる者であります。此問題を曖昧模稜の間に葬り去る如くんば、將來の我國の綱紀と云ふものは、絶対に維持出来ません。

五、所謂五萬圓事件を語る

— 疑惑に包れた新事實 —

私が去八日衆議院の壇上に於きまして、國務大臣の居らざることを遺憾としつゝも、現在の國情と對照致しまして一日も忽すべからずと考ふる點より致しまして、質問を發しました事柄に對しまして、端なくも議員の間に囂々の議論を惹起致すことに相成つたことを遺憾と致す者でございます。

回顧致しますれば、昭和六年の五月雨の降る五月の半ば頃であつたことを私は身震ひを致しながら茲に御話申上げなければなりません。それは鳩山一郎君よりして、或人を介して私に至急會見したしと云ふ申込が參つたことがあるのであります。

私は黨籍を同じうして居りました關係上、當時私は議員の籍は持つて居らないのであります。鳩山氏よりの招きに應じまして會見致したのであります。

その時鳩山氏は、鳩山家の一家一門の浮沈に關する問題に逢着したからして、鳩山家の一家一門、即ち法律家であるところの一家一門を集めて、こゝに協議をいたした結果、斯う云ふ方法を以てするに非ざれば、この或る發生して居る事柄に對して、どうすることも出来ない結果を招來するが故に、君にこの事を頼むと云ふ、或ることを私に話されたことがあるのであります。

す。

それはどう云ふ事かと申しますと、恰も樺太に突發いたしました樺太工業の瀆職事件……この瀆職事件にそこで私はその内容を聞き質しましたところ、或る方法を講じて、この證據を湮滅するに非ざれば、自分に對するところの或る重大事項が起るが故に……そこで私は其話に應じまして、或る場合に於きましては、そのことの實行に當るの餘義なきことを承知いたしましたのであります。果せる哉、その事柄は證據不十分の故を以て、今日起訴猶豫と云ふことに相成つて居るのでございます。その時或る金は假拂金と云ふ名稱になつて居つた、その會社の帳簿に於いては假拂金となつて居るからして、何處へその假拂金が行つて居るんだと云ふと段々さう云ふものゝ先々が甲である、乙であると云ふ風に隠し、答辯をして、之を消して行きました。最後に五萬圓の一つの塊りは、どうしても行先を答辯することが出来ないといふこととに成つたのであります。そこで假に人を茲に拵へて、さうして之を彌縫すると云ふ風なことは、さう云ふ金の授受に於て當然行はれる一つの答辯方法であります。樺工事件に於きましては、今申し上げたのは其例であります。其五萬圓と云ふものは、どうしても行先をはつきり

することが出来ない結果、政治に活動してゐる一個の浪人岡本に此五萬圓を呉れてやつたと云ふ證言を致して其事が終りを告げたことがあります。そこで、しかしながら金の行先の究明など云ふ事は容易なことではない、そこで私は願ひて思ふ、誰にしても私も皆悉く國民の代表たる地位を、かち得て居るのであります。其言動いやしくも人に累を及ぼし或は自らの神聖をきづつくるが如き事をなすべきものではありません、そこで只今のやうな行爲が一國の國務大臣にありとするならば、其の結果はどうなるでありませうか。私は結果から聞いて行かなければならぬ、さうすると其國務大臣は、實に國民に對して申譯がないと云ふよりも、陛下に對して何と申譯をなす事が出来るか、吾々議員としても亦さうであります、若も不正の事をした人がその中にありとして、さう云ふ事が究明されるに隨つて茲に虚偽を作ると云ふ事になると、此の神聖なる議場が潰されると云ふことにならざるを得ない。

私は紛々擾々として徒らに茲に論議する者ではありません、私は只今例をとつて申した事、其ことが、昭和六年五月に於て、文部大臣鳩山君に依つて行はれた事實であつた事を絶叫し、國民と共に、陛下に對して何と申上げてよいものか、私は自ら判斷する能はざる次第であります。

樺工事件の五萬圓といふことは、當時そのみではありません。各方面から金を集めたのであつて、是は唯一つの例に過ぎません。聞く所に依れば、岸和田の寺田家には矢張り當時人を以て書面を持参せしめ、献金して呉れと申送つた手紙が、現に残つて居るといふことも私は聞いて居ります。其の手紙を持つて行つた人間は、現在或事件で大阪の刑務所に收容されて居ります。其の他同様の方法手段で、彼方此方から金を集めたものと思はれるのであります。

更に政界の裏面に蟠る噂の醜怪事を並べ挙げれば、兩備鐵道の買上げに關する奇怪なる金員收受……之には某閣僚、某政黨領袖、某々代議士等渦中の人と稱せられてゐます。又、朝鮮に於ける水和組合補助金を實際工事費以上に支出を爲し、之を某々大官に分與贈賄せる問題は、數口にて數百萬圓に上つてゐるさうであります。鐵道工事談合金問題、是は鐵道省高官、某代議士、前閣僚某氏等に關する談合金分配の醜怪なる永續行爲等、挙げ來れば大小幾多の許す可らざる綱紀紊亂の問題が放擧に遑あらず、人心不安の根源一に茲に存するのであります。

六、査問會は私に何を語らせたか？

—各委員の質問に答へて—

私は、以上の醜状を今議會に於て、前に述べた如き、政界革新の已むに已まれぬ信念から起つて、暴露致しまするや、けんくごうくとして議會の大問題となつたのであります。私は、徒らに事を起さんとするものではありません。私の投じた一石が幸にして、政治改革の導火線ともなれば、私の目的は達せられるのであります。又、私は、左様あらん事を祈つてゐる次第であります。

かくして、問題は更に其真相を究明することとなり、衆議院に於て委員會が組織され、各委員の質問に答へることとなつたのであります。

以下、所謂査問會に於ける演説を中心として、事實の究明をして見たいと思ひます。

臺灣銀行保有株の賣買に於ける背後の力といふことを査問會でも述べたが、それは最近大

阪から私の處へ人が参つた。その者の話によると、大阪の財界では殆ど、色々な事實によつて證據は擧つて來てゐるといふことを前提として、私に話して呉れたのであります。昨年五月、例の赤化教授として京大を追はれた瀧川教授の問題に對して、鳩山文相が其處へ旅行をされたことがあります。その問題の解決をなさんが爲めに……其時に甲子園ホテルに泊られたさうです。それから京都に行かれた、即ち京都に行かずに先に大阪に行かれて、一旦甲子園ホテルに泊られたのであります。其時誰と會見されたか、其會見を誰が取次いだか、そこに問題の人が現はれて來る、秘書官として隨行して行つた林讓治君が取次いでゐる、刺を通じた人は誰であつたか、大阪の株商人として有名な野村徳七君其人が訪問して居るのであります。林君は、そこでもう既に關係が生じてゐる、かくして其會見が京都に於て行はれまして、大阪の財界には當時パット斯ういふ噂が擴つた、此成功報酬は二百萬圓である、それで話は出來たさうだ……と。

それから米田規矩雄君の點であります。米田君はどういふ關係があつたか、米田君と住田巳一君とは、衆議院本會議に於ける一身上の御辯明に依れば、會つたことがないといふことでありましたが、會つたことがないところではない、年中會つてゐる仲であります。又岡崎旭君と

の間も年中會はれて、岡崎君の如きは、かつて、帝絹の新重役になつて赴任される時、是等の友人を訪問して歩いて居られます。君達の後援の御蔭によつて僕も今度榮達したと言つて、訪問して歩いてゐる、何處に關係がないか、皆關係があるのであります。

今議會二月十五日の本會議に於て、私が一つの例として引用した樺工事件の當時の事柄であるが、鳩山氏と私との間のことであります。鳩山君は、岡本と會つた事もないといふことを断定されてゐる、又鳩山氏の夫人は、助太刀の積りで、岡本なんと云ふ奴は一過も家へ来たこともないし、會つたこともない奴だ、斯ういふ事を新聞に麗々しく述べられてゐます。鳩山氏の家に私が行つたことがあるか無いか、會つたことがあるか無いかといふことを申せば昭和四年の四月二十日に田中内閣が成立致しました、と同時に鳩山君は内閣書記官長に就任されました。この内閣書記官長に就任されたことに對して、黨内物議囂々として起つたのであります。彼は會て脱黨して政友本黨へ行つて、戻つて來てもなく幹事長になつた、又幹事長も僅か勤めて置いて今度内閣書記官長になつた、如何なる功績があつたかは知らぬが、其榮達振りは實に目覺しいものだが、受ける本人の心事が不都合であるといふ風なことで、黨内の物論

は囂々として起つたのであります。その物論の反映として、氣の早い人、血の氣の多い院外團の人々の中には、やつつけてしまへといふ風なことになりました、出入非常な警戒を以つて非ざれば身動きの取れないやうな有様になりました。それで黨内はよいにして、院外團との間の斡旋をしなければならぬ事となり、其役目を私が言付けられました。そこで私も斡旋する以上、鳩山氏とも會見しなければならぬ、で鳩山氏の家へ行つたことがある、其當時の事でもあります。鳩山氏の家の子郎黨の狼狽振りたるや音羽の坂から自動車と共に尻餅をついた人もある筈です。其時に私は鳩山君の所を御訪ねして、其斡旋の仕方について相談をしたこともある、其時、あの夫人は二階の日本間に案内して、殆ど感謝の言葉は實に叮嚀懇切を極めて一生懸命になつて、私に御頼みになつたのであります。又解決が着いた時も訪ねて會見したのであります。ですから私と鳩山君とが會つたことがあるとか無いとかいふことは全然虚偽であります。

こんな虚偽のことが發表されますれば、小國民は何と考へるかといふことを私は恐れざるを得ない、小國民は文部大臣は嘘を吐いたか、とこういふ風になるだらうと思ひます。この影響は蓋し恐るべきことと思ふ。

又、あの樺工事件でも同様であります。鳩山家としては、折角二代掛つて築き上げた鳩山家の名譽、鳩山家の浮沈といふものに關するといふので、「君一つ丸の内の大川田中事務所へ行つて呉れないか、藤田好三郎といふ人に會つて来てくれないか」さう云ふ譯で名刺も何も渡さなかつたが「君の名刺を出せば待つてゐるから、直ぐ通して呉れる」といふことで、私は名刺を持つて行つた、すると早速二階へ通され應接室のやうな所へ通され「あなた御引受下さつたさうだな」斯ういふ話であります。で「御引受下さつたと言ふと何ですか」と言ふと、其人は非常に狼狽して居たやうでした。成程狼狽したでしょう。當時毎日のやうに検事局に喚ばれてゐた時なのですからして、アツと云つたやうな態度でした。それから「今来たあの案内をした男をよく覚えて置いて頂き度い、さう言はれたので、歸りに深く注意して來ました。黒い詰襟の服を着た四十位の、或はこれより上だつたかも知れない丈の高い男でありました。『あの男をよく覚えて置いてくれ、それから此部屋の恰好、前にあなたを御案内した時の部屋の模様もよく覚えて置いてくれ』といふ話で、後はお茶を飲んだ位で歸つたのであります。何だか狐につままれた様な考へで歸りました。歸つてから再度鳩山君に逢つて話すと、それから愈々鳩山家浮沈の問題が出て來たのであります。

「今君に行つて貰つたのは、實は彼處から金を君に渡したといふことになつてゐるんだ、藤田好三郎君から君に渡したことに話についてゐるんだ、君がもし裁判所から喚ばれる事があつたなら、受取つたと云ふことにして貰はねばならぬ、検事のことだからして簡単に済ませることは中々困難だらう、それで、どういふ人間が案内したか、どういふ恰好の部屋であつたか、どういふ所で受取つたかと云ふ風に多分糺されるだらうから、其爲に君に彼處の家に行つて貰つたんだ、尙金を受取つた時の光景に對しては、現金で受取つたか、小切手で受取つたかと云ふことに必ず追究して來るだらう。それは新聞紙に包んで現金で百圓札で取つて來た、斯う申立てて、呉れ、其新聞紙はどうだつたと言はれた時には、それは何新聞だつたかまでは分らないと言つて貰ひたい」斯ふ云ふ打合せが行はれたのであります。「それで君を其任に當てた理由は丁度宜いことがあるのだ、君は昭和三年に立候補をして其時失敗してゐるんだ、だから其時の金にして置けば宜いんだ、其貰つた金は準備の金であつたと云ふことに申立てれば宜いんだ」斯ふ云ふ話でありました。「それでは、あなたがそれ程困ることであり一家の浮沈にも關することであるとまで云ふことなら、宜しい、御引受致した」斯ふ云ふことになつてゐたのであります。それで暫く私は呼び出されるのは何時かしらと考へ旅行もせず東京にゐたのであります。

す。其間に元の拓殖局長成毛基雄君が私の所へ念を押して来ました。「先達の打合せを完全君が遂行することに變りはないだらうナ」と言ふことであります。此の事實を以て私は、議會に於て、證據湮滅の行爲であると斷言したのであります。

二ヶ月位で遂に呼出しが來なかつた、そこで或日あれはどうなつたのかしらと云ふ事を尋ねた事があります。であれば行く行つたよと、此言葉で初めて私は、もう呼出される事はないと云ふ事を知つて、安心したのであります。それから百三十人の人に、盆暮に金を配る程の仁俠の人だ、だからして、それだけの大きな事を汝に頼んだ程であるからして、汝に報ゆる所があつたであらうと云ふ御話でありますが、私は酬を求めても居りません。又酬いられても居りません。私の引受けた理由と云ふのは、外ならぬのであります。森氏と私との關係を述べる事は議會で上田君が非常に興奮されたのであります。上田君の興奮された程、此事を申述べる事は、私も餘り快しとは致しません。併ながら、森氏と私との間に於ては、總てを許したのであります。私は森氏が本當に偉い人である信じ、森氏を以て本當に天下國家に森氏が其經倫を行ふ時ありと信じて、此人の裏に一臂の私が勞を盡します事は、代議士として出るよりも、寧ろ國家に對する御奉公になりはしないか、斯う信じて居つたのであります

からして、其點に於ても、何も私は求むる所がなかつたのであります。鳩山氏其人、是も私行爲の批評は私も致したくない、私行爲の批評は私も致したくないのであります。先に申述べた事に附加へて申すならば、百三十人の人に金を配つたと云ふ事も、是は仁俠の氣が齎した結果ではなくして、黨内に於て勢力を張り、野望を遂げんとする、其志の手段に用ゐたものであると、私は今日でも思つて居るのであります。

査問會に就て鐵相秘書官米田君は頻りに關係を否定して居るが、住田正一人が鐵相を官邸に頻々と訪問して居ることは官邸の來訪者名簿にはつきり残つて居る。是等も三士氏が深き關係を有つことを推測せらるゝものである、人絹株と神戸製鋼所株との將來はまだ一値上りを見ることは明か、是等のことは臺灣銀行の當事者が誰よりも一番よく承知して居るに拘はらず、賣却した其事だけでも疑惑は十分である、鳩山氏と云ひ三士氏と云ひ何れも黨内勢力扶植の爲遂ひに斯かる所に迄利用されるに至つては政黨組織の如何に缺陷多きものであるかは證據立られるのであります。

「住田正一人と米田規矩馬君とは世間で云ふ様に、鐵相三士君の所に落合つて居ります、落合

つて協議を遂げたのであります」これに對して查問會に於ては無責任なる放言であるといふことを言はれましたが、決してさうではありません。秘密の會合をして屢々集つて事を相談し、結果として現はれたものは、あの株の取引である、其秘密の部屋の中に於て協議されたことに對しては、本人二人を呼出して究明する以外に立證する方法はなからうと思ひます。それで查問會に於て無理な御尋ねと思ひ「それは壁に聞くより仕方がありますまい」と申したので、無責任な放言をしたのではないといふことを明記したい。

住田正一君が現實に事に携つて居り、三土鐵相の邸を用いたといふことも私は申したが、是も結果からして當然證明されるものがあります。全體の株の中から住田君自身の名義にして其「シンジケート」の中から取つたものが一萬五千株ある、その中私共の聞く所に依れば、一萬二千株と云ひ、一萬株と云ひますが、其株は、貴族院議員松平頼壽伯を頭取とする高松の第百十四銀行に行つてゐる、昨今聞く所に依ると、其銀行の最高の指導者である前貴族院議員鎌田勝太郎君より、三土鐵相に對して大分苦情を持たせて、「あんな面倒な株を持たせられて閉口してゐる、世間はうるさいし、新聞は麗々しく書くし困つたことになつた」と云つてゐる。三土君も又それに困つて昵懇の人、といふよりも尊敬すべき人に洩らしてゐます。

鳩山君が此事に關係してゐるといふことは、これも鳩山君が政友會の幹部の二、三の方に報告された事があります。それは「あの指摘された事實は實際迷惑な話だ——私の指摘をさすのであります——しかし關係はたしかにあつた、中途で其關係は打切にした、即ち井口延次郎君を介して野村徳七から頼まれて最初斡旋したが後に自分は手を切つた、隨つて報酬を取つて居らないから安心して呉れ」といふのであります。是れ即ち關係であります。

かくの如くして、世間は臺灣銀行保有株の賣買を皆疑惑の眼を以て眺めて居ります。私が指摘した事實に依つても、疑惑は充分存在して居るのであります。即ち賣るべき時ならず、其宜しからざる時期を宜き時期なりと強辯し、又賣買の契約の中に含まれて居る金の、餘つた金の行方が何處に行つて居るか分らない、さう云ふ取引をした者に對しては、世間には之を正當な行爲として認める者は、一人もないと云つて差支ないと思ふのであります。即ち左様な不正が、而も政府監督の下にある臺灣銀行、國民の負擔に歸せしむる莫大なる融資を受けて居る所の臺灣銀行此銀行の監督に際して、政府當局が放漫に監督して居るとしましたならば、實に怪しからぬ事と言はなければならぬ、先達中、あの僅かばかりの追加豫算を出すか出さぬかに對

してさへ、非常なる努力を拂つて居る、況んやその十倍にも達する何億圓と云ふ金、其金が國家から融通をして居つて、其金の運用に依つて今日迄続びは見せたけれども、本當の破綻をせずに来た所の銀行、此銀行に對する監督が極めて周密である趣旨と、嚴格なる監督と、之を合せ行はるべき筈のものである事は勿論であります。そこで、此嚴格なる監督と周密なる趣旨を以て行はなければならぬ所の臺灣銀行に於て、誰しも疑はない者の殆どないと云ふやうな、そんな不正なる取引の行はれる事に對しては、必ずや普通の手段を以てしては行はれるものではない、それを行ふに付ては、有ゆる方法を講じて、目的遂行の爲には手段を選ばずに、其人々が行つたと云ふ事は想像される事實であります。併し乍ら私は今迄申上げた如く、揣摩臆測ではない。殆ど國民の全部が疑つて居る、國民全部の疑ふものを私一人が疑つた如くに解されるのは、所謂世間を見ない、國民の聲を聞かないと云ふ事に歸着せざるを得ないと思ふのであります。

七、斷乎として政黨を改革せよ

— 私の改革意見 —

今や内外非常の秋に際して、國民が要望する所は斷じて議會に於て醜怪なる場面の展開ではなかつたことを私自身も知つて居ります。併し乍ら本當に必要な國策を樹立し、内政を整へんとするに就ても、腐敗其極に達したる今の政黨と政府の當路者を以てしては、到底期待すべからず、即ち先づ大建設の前に大改革を敢てし、然る後に其事に着手すべきであると考へたので、已を得ず此手段を採るに至つたのである。千九百三十五年六年は徒らなる標語ではない、國民は日々眼前に展開される新聞の報道に依つて、或は國際關係好轉せしとか、或は勢ひの極まる所或は一轉機を來すにあらずやと、其日々々の記事に依つて觀念を支配されて居るが、實質は左様のものにあらずして、益々我帝國の立場を危局に進めつゝあります。

日滿經濟ブロックのみを以てして、我産業上必要とする資源を充す能はず、又生産品の消費地を現在以上に開拓するにあらずれば躍進日本の事業は、機械の運轉を調節しなければならぬ

と申さねばならぬのであります。

元來我國の工業は、原料を海外に仰ぐにあらざれば到底成立しない國柄であり、此國情が海上の通商戦を海軍力に依つて保持する以外、工業の維持は到底之を圖ることが出来ません。滿洲の獨立に依つて、將來亞細亞に於ける各民族に非常なる覺醒を促し、延いて國策の規模も雄大化せられた今日、接觸する國際關係は到る所に尖鋭化して來て居る、日印會商も其一つの現はれであり、今、日英會商も現に行はれつゝあります。斯くて歐羅巴人が優逸なる生活を國民に爲さしめたる其原因が、東半球に於ける消費地の把持に外ならざりしことは、最近に我國の商品が到る所に進出するに影響を被り、彼等の諸國が産業の不振を來し、延いて國內不安に及び、更に世界不安の現狀を醸し出すに至つて居ることを考へる時、躍進日本に對して凡ゆる壓迫、凡ゆる手段を以て對抗し來るべきことは當然の歸結と考へます。

而して之に對處するに就て、先づ整へねばならぬものは國の政治の根底からの建直しと、其建直したる政府に依つて又、政治の活きた力を實際に必要とするのであります。

申迄もなく、憲法に依つて、議會が立法の事に當る、此議會運用の上に於て、自然に政黨が必要であるといふことを考へる時、政黨の腐敗、萎微不振、是が國政に及ぼす影響は實に重大

であるが故に、此政黨の改革は亦現在に於て喫緊のことと申さねばなりません。人動もすれば政治腐敗の根源が選舉の腐敗に起因すると稱す、併しそれも一つの原因には相違ないが、一大勢力を結成して巨然たる大政黨を作る時は、茲に私心を以て其大政黨の力を悪用し、權力壟斷を策するものゝ出て來るのも亦免れざる所とも思はれます。故に差當つては大政黨の存在を分割に導くことも一つの改革促進の手段方法であるとも考へられるのであります。併し乍ら、我國の政黨發達の過去を顧る時は政黨員なるものが、宗教的信仰を有つて居るが故に、談は容易であるが此實際化は中々困難であります。

そこで之を打開する方法としては、新たな指導精神を以て、それ〴〵此信仰的政黨員を牽制すること、國民は心懸けなければなりません。新たな指導精神とは、例へば千九百三十五、六年を目標とせる國民運動、之を以てすることも一つの方法であります。又曾ての國際追隨主義を棄てたる獨立日本といふことの精神を指導原理として、何事も自國の有する力、それ自體を以て進むといふことの運動を起すも亦一つの方法であると考へます。又、廢れ行く農村此農村が如何にして堅實なる社會を維持し行くべきかといふことに對する農村産業主義の新運動、之を起すことも一つの方法であります。

以上の如くして、信仰的に固まり來れる政黨員を牽制し、遂に覺醒せしむることを得ば、眞の大義正道の確立に一步を進むる所以ではないかと思ひます。我國民は、容易に因襲を脱却し得ぬ民族性を有つては居るが、目覺めれば舊衣を脱却することにも勇敢な國民であるが故に、前途を悲觀せず私に政黨を改革し、並に政治を刻下の現情に即した立派なものたらしめることが不可能とは思ひません。即ち微力なりと雖も此事に渾身の力を注ぎたいと思ふものであります。

政黨改革要旨(一)

政黨現在ノ組織ハ果シテ其當ヲ得タルモノナリヤ否ヤ大ナル疑問アリ。

總裁、總務、幹事長、幹事ト上ヨリ下ニ一直線ニ機關ヲ作ル形體ハ統率ノ方法トシテ普通ナルガ之レハ戰鬪隊形ト云フベキモノナリ。

然ラバ政黨ガ戰フベキ對手ヲ何レカニ置クモノタルガ大體ニ於テ

議會ニ於テ反對黨ト戰フ

選舉ニ際シテ亦反對黨ト戰フ

以上ノ二ツヲ出デズ

議會ニ於テ團體鬪争ヲ爲スノ結果ハ方法トシテ所謂幹部ノ指示ニ從ヒ一絲亂レザル行動ヲ爲スガタメ政策ニ於テ不徹底ノ程度ニ議ヲ纏ムルノ不合理ヲ已ムベカラズトス蓋シ必シモ除外ヲ要セザル點ニ微溫的ニ決スルノ外ナキニヨル

亦幹部ニテ當ラズサワラズノ程度ニ決定スベキコトヲ豫想シ慎重ニ且ツ廣汎ニ研究調査ス

ル議員ヲ稀ニスル結果緊張ヲ缺ク

亦幹部專制ノ弊ニ陥リ延テ不測ノ疑惑ヲ買フ原因ヲ作ル假令バ財閥トノ醜關係ヲ猜視サル、如キソレナリ

幹部制度ハ當然ノ趨向トシテ幾多ノ黨内閣ヲ作り縁資相引キテ私黨ニ墮スルノ免レザルモノアリ殊ニ中選舉制タル現行法ノ下ニアリテ惡例枚舉ニ違アラズ

更ニ私閥ハ親分子分ノ關係ニ於テ議員ノ職分發揮ヲ阻害スルノ實情ヲ醸シ延テハ政治腐敗ノ根本原因ヲ作ル

以上舉示セル實際ニ省ミルトキ現在ノ政黨組織ハ根底ヨリ革新ヲ要スルモノタルベシ

殊ニ恐懼ニ堪ヘザルハ每期議會ノ開院式ニ際シ下シ賜ハル勅語ノ卿等慎重審議克ク協贊ノ任ヲ竭サンコトヲ

拜スル 聖旨ハ議員タルモノ皆等シク甲乙無ク精勵其任ヲ全フスベキノ御示シナリ苟モ幹部專制ニ服セシムル嫌ヒアルモノヲ存スベカラザルナリ組織改革夫レ急務ナラザランヤ

改革案アリ一切ノ幹部制度ヲ廢スコトヲ原則トス

而テ黨務ヲ處理スルニ適當員數ノ月番ヲ置キ交替トシ内一人又ハ二人ヲ次ノ月ニ事務連絡ノ爲メ跨ラシム政務調査會ニ在リテモ恒久性アル役員ハ全廢シ黨議ニ諮ヒ調査スベキ項目ヲ決定シタルトキハ其ノ調査完了ヲ任期トスル主査並ニ委員ヲ置クコトトスベシ

政黨改革要旨(一)

憲法政治ニ於ケル議會ノ任重キハ言フ俟タズ、議會機能ノ運用ヲ極端ナル黨本位ニ置クハ一
大過誤ナリ我議院法ハ黨派ニ偏セザル部屬ノ制ヲ定メタルニ拘ラズ之ヲ實質的ニ破却シ黨爭ヲ
激化ニ導キタルハ遺憾ナリ之ヲ還原スルハ刻下ノ急務ニ屬シ議會ノ權威維持策ノ一タラント信
ゼラル即チ左ノ如ク改廢實行スルヲ要ス

イ、黨派別控室ヲ廢シ部ニヨル控室ヲ設クルコト

ロ、常任委員等ノ選舉ハ部ニ於テ現實ニ行フコト

ハ、議席ハ黨派別ヲ廢シ抽籤ニヨルコト

ニ、議會開會中ト雖モ繼續委員ヲ置クノ制度ヲ實行セシムルコト

ホ、比例代表選舉制度ハ徒ニ政黨幹部ノ權力ヲ増大スル結果ヲ來スモノトシテ絶對ニ不可ナルコト

躍進國として遭遇する荊棘か、久しきに亘る外交自主没却、建國の精神弛緩と對内外政策の支離滅裂によつて招來せる國難かに費やすの詮索は之を閑人に委かせ吾等は直ちに刻下の國情に對し碎心善處せねばならぬ。見よ層々として襲ひ來る通商の阻碍は我産業を封鎖に導かんとし國內經濟は僅かに命脉を維ぐに過ぎず、一昨年滿洲事變を動機とし民人稍緊張を加へたりと雖も庶政低調未だ以て興隆の途に上りたりと云ふ能はず、殊に國際平和は單に軍備と言はず總體的國力の均衡を失するとき如何なる支柱を持ち出し來るも其用をなさずして一瞬にして破るゝは隙かである。國防軍備の充實と國力の培養今日より急なるはない。

而て國力増進は一に生産の増加と生産者の經濟整備に期すべく増大する國費の負擔は之れに俟つのみ、翻つて察するに現内閣の爲さんとするところ財政の辻妻は赤字公債によるのみにして産業政策は統制經濟に名を籍りて實は脉絡無き目前の現象に支配されたる無統制を敢てするに過ぎない、之れによつて生産の増大經濟の整備求むべくもない。従つて膨張する國費を明日

に繼續調辨する如きは斷じて期すべからざるところである。吾等の策を樹て之が實現を期する一日を緩ふすべからざる國情に因る。

實現實施を期する項目左の如し。

(一) 國 防

國防は東亞全局の絶對安全保持を目標とし國力總動員の準備萬全を期し殊に倫敦海軍條約の齎らせる缺陷に對するの措置に遺憾無きを期せざるべからず。

イ、陸軍にありては國防線の擴大に伴ふ組織の改善並に新兵器の充實。

ロ、海軍にありては我通商線の確保と西太平洋に於ける制海權の把握に必要な各種兵力の充實。

(二) 財 政

財政は歳入出の整調を期し官業收入の増加を計り租税は負擔の均衡を得せしむるを要す。

イ、酒類の專賣を實施すること。

ロ、保險事業の國營を實施すること。

- ハ、石炭を國營とすること。
- ニ、化粧品の特賣を実施すること。
- ホ、取引所に於ける清算取引の賣買差益税を新設すること。
- ヘ、國債利子を引下ぐるること。
- ト、自治體の財政窮迫に對し交付金制度を実施すること。

(三) 産 業

産業經濟政策は綜合統制を根本方針とし農林、商工兩省を廢合して産業統制省とし増産通商並に消化を合理的ならしむることを要す。

- イ、米の特賣を実施すること。
- 但本年度は輸移入米の國家管理内地産米は米穀統制法により最低を石二十五圓以上と指定し即時實施せしむること。
- ロ、肥料を國營とすること。
- ハ、農業は自作を原則とし耕地分配に關する方法を実施すること。

- ニ、畜産物、海産物加工の設備を勸奨し之に要する資金の供給を計ること。
- ホ、中小商工業に對する業別並に地域別の信用資金疏通の機關を創始助成すること。

(四) 教 育

現今の我教育は制度内容共に缺陷甚し躍進國日本の國情に適すべく建直しを要す。

- イ、學術の蘊奥を究めんとする大學にありては豫備科を附設すること。
- ロ、中學校並に高等女學校は廢止すること。
- ハ、義務教育を分ち第一を七年(男女普通國民學校) 第三を三年(男女高等國民學校)の各修業年限とし第一は市町村立とし第二は市町村亦は市町村の合併にて施設すること。
- 第一、第二共に日本國民としての觀念を旺んらしむることを主眼とし適當に課目を配するものとす。

- ニ、各種職業教育の學校は第一又は第二の義務教育修了者より收容し年限課目等に關し一定の準則を設くることなく各々其必要に應じ定むるものたらしむること。

(五) 行政振作

我行政各部は事務繁瑣を極め且つ冗員徒らに多し共に一大革新を要す。

イ、内閣には總理大臣並に國務大臣數名を置き各省には大臣を廢し省長官を置き統轄せしむること。

ロ、現業を除き行政官廳は現員の三分の一を減ずること。

ハ、新たに創始する官業に要する職員はロの減員を以て充當すること。

昭和九年三月三日印
昭和九年三月六日發

刷行

定價金 十 錢

版 權 所 有

編輯兼發行人 伊 藤 稔

東京市芝區田村町四丁目十八番地

印刷者 青 野 仙 吉

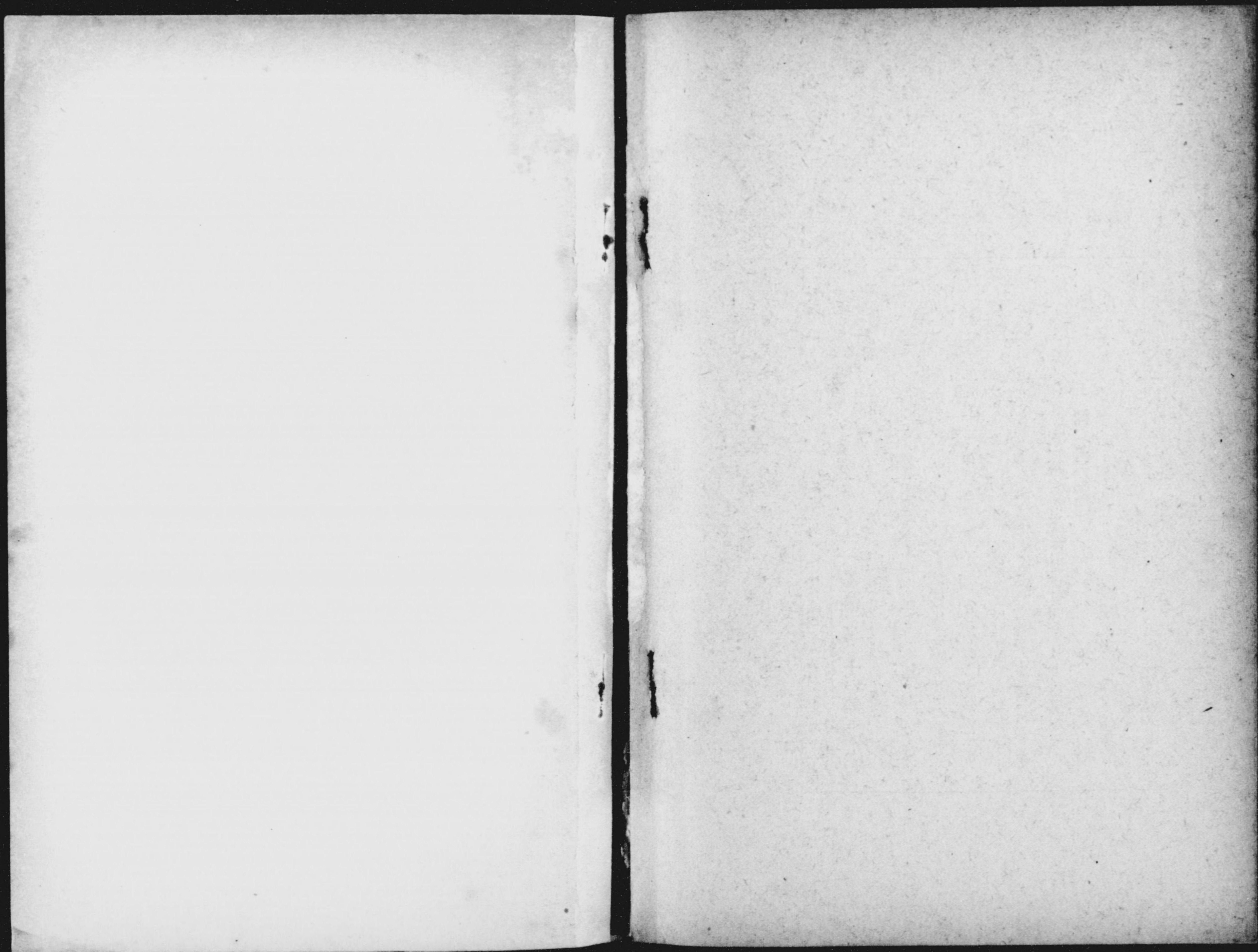
東京市芝區田村町四丁目二番地

印刷所 三陽堂 青野印刷所

東京市芝區田村町四丁目十八番地

發行所 大 文 社

振替東京五八四八九番



新刊廣告

元臨時帝室編修官
渡邊孫治郎監修

明治・大正・今上三帝聖德錄

菊版四二〇頁上製
定價參圓五拾錢

東京楠公會
堀田善太郎編著

密寶楠公遺訓書

菊版三二〇頁上製
定價參圓

滿蒙高等學院講師
森川由惠著

滿洲語速成講座第一卷

三六版三〇〇上製
定價壹圓參拾錢

滿蒙調査會
安藤勇助著

滿蒙にて成功するの道

四六版三二〇上製
定價壹圓參拾錢

發行申込所

東京市芝區田村町四丁目十八番地
振替東京五八四八九番

大文社

御注文は本社直接前金又は代金引換にて願ひます

